

各駅停車・大分県歴史散歩

# ふるさと駅の駅

(3) 別府

初版：2007年3月16日

⑩ 東別府

古くからの温泉街



●この電子ブック「ふるさとの駅」＝各駅停車・大分県歴史散歩は、昭和58(1983)年7月20日から翌年の1月28日までの約半年間、115回にわたり大分合同新聞に連載されたものです。25年後の今年、電子ブックとして復刻しました。

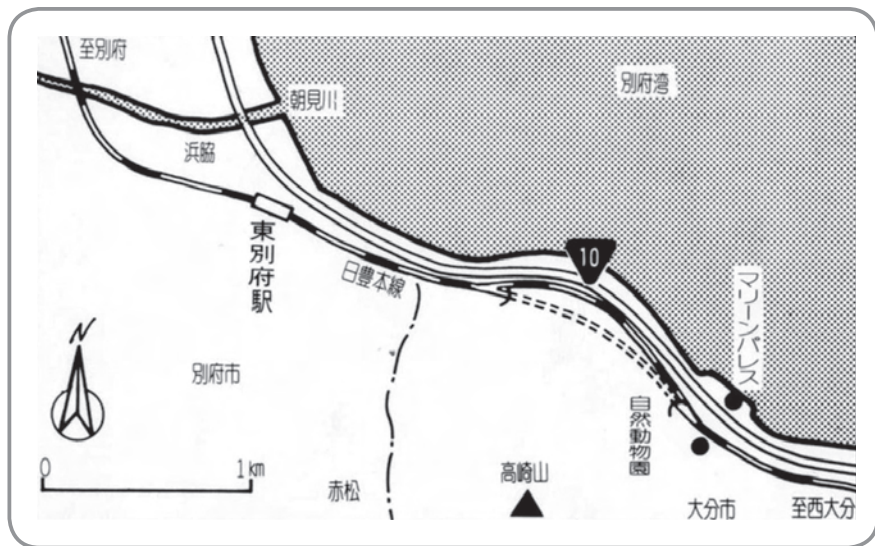
したがって記事中の「いま」や「現在」は25年前の状況を示しており、その後駅名の変更や路線の廃止などもありますが、当時を思い浮かべながらお読みいただきお楽しみください。

東別府駅開業：明治44  
(1911)年11月1日

## ■旧駅名は浜脇

背後に丘、前面に海。大分市の西大分に対して東別府は全く同じような立地条件をもつ別府市の関門といえよう。

もっとも、東別府という駅名は昭和9(1934)年4月15日からで、開業当時からそれまでは浜脇といていたようだ。



浜脇は文字通り海浜の脇(わき)に発達した町だが、いたるところに温泉が湧(ゆう)出し、海岸の砂浜からも湧(わ)くことから浜湧と呼ばれたのが起源と伝える。ともあれ鎌倉時代から文書に見える地名で、古くから別府八湯の一つとしてよく知られていた。

開業当時の駅名が浜脇を採用したのは当然のこと

だったが、それを東別府と変えたのはなぜだろう。温泉都市として別府の名があまりにも有名になったことから改称したとも考えられるが、おかげで由緒ある駅名が消えたばかりか、別府の名の中に埋没してしまい、浜脇の人たちはかえって損をしたような気がする。

駅裏の丘陵は別府市街の南を限る断崖(が

<メモ>

周囲にある名所旧跡等の東別府駅からのおよその距離

- ◇浜脇温泉街 (0.5 キロ)
- ◇浜脇公園 (浜脇温泉が建てられた年に開かれた中外産業博覧会の第一会場、昭和32 = 1957年の別府温泉観光産業大博覧会のさいも第二会場となる。別府市南東部の市民いこの場。0.5キロ)
- ◇高崎山自然動物園、マリンパレス (2.5 キロ)

い)として西方に続いており、断層崖である。浜脇に温泉がよく出るのもこのせいだといわれ、市内でも泉源が密集したところ。泉質は単純泉が多く、リュウマチや外傷によいとされる。

### ■にぎわった歓楽街

天文19(1550)年2月10日、いわゆる「二階崩れ」で大友宗麟(当時義鎮)が大友氏の統領となったことは大分駅の項でもふれたが、彼がその変つまり父の義鑑が義鎮の異母弟を後継にしようとして家臣に殺害された事件を耳にしたのは、この浜脇で湯治中のことだった。

近世は温泉のほかにショウガや七島イの産地としても知られ、海では漁も盛んだった。この湯治場の村の様相を変えたのが、明治33年の大分－浜脇間の電車開通、さらに鉄道駅の開業だった。旅館、料亭、妓楼などが次々と建てられ、たちまち歓楽街に変身。開業当時の駅の乗降客は年末までの2カ月間で1万人、大正末年には年間46万人を数えたという。

昭和3年には、それまであった東西両温泉の建物を一緒にして、ドイツ・ルネサンス式の鉄筋コンク

リートによる浜脇温泉が完成する。いまでもこの建物を中心に旅館街が広がっているが、往時は遊郭としてさまざまな情話を残したところである。

昭和33年の売春防止法はこの灯を消し、旅館街として再生させたが、近年のレジャー多様化や旅館・ホテルのデラックス化に取り残され、しかも温泉の湧出量の減少、別府市街地の北進などの影響もあって、現在はいささかさびしい。

### ■朝見は「熱水、熱海、

明治期の旅館、料亭などの建設は、当時船だまりだった朝見川の河口右岸を埋め立てたものだが、この川をさかのぼると別府の総鎮守という朝見八幡社がある。八幡さまといい、遊郭といい、この点も西大分と似ている。

朝見という名は郷名として奈良時代から見られる地名。いまは浜脇の西の地を指しているが、古くは別府市域の大部分を含む広い範囲だった。

古い文献には「敵見」と書かれている。これならアタミである。熱水とか熱海の意と考えられ、熱海市と語源を同じくする。温泉が縁となって別府市と

熱海市は姉妹都市となっているが、地名もあい通じているわけだ。

### ■難所だった別大海岸

駅前前の国道10号線を大分方面にたどると野生ザルの高崎山自然動物園や魚の曲芸と回遊水槽などでユニークな大分生態水族館・マリンパレスがあり、観光大分の目玉商品である。高崎山は大分市に属しているのだが、別府市から行く方が近い。

ところで、日豊本線も国道10号線も海岸線を走っており、西大分ー東別府間は別府湾の海景が名物だが、両者が開通するまでは波打ちぎわのたいへん危険な道だった。崖（がけ）につけられた小道で、人と人がすれちがうのもやっと。通行人は遠方から互いに声をかけあって、広い部分で待って離合したとも伝える。

当時、官道は東別府から赤松を経て高崎山の南にある銭瓶峠（赤松峠）に登り、西大分の下っていた。📍

① 別府(上)

世界に誇る湯の都

別府駅開業：明治44  
(1911)年7月16日



◀ 別府の町と鶴見岳の連山

## ■国際都市の自負

大正時代の話だが、別府駅の待合室に時刻表と並んで「別府ーシャンハイ（長崎経由）五十五時間、二等四十三円八十六銭、三等十六円九十三銭。別府ーウラジオストック六十六時間、二等四十一円五〇銭、三等十八円十五銭」という掲示があったそうだ（窪田勝則氏編著『大分の鉄道』）。

別府っ子もびっくりしただろうが、観光客の度肝を抜くには十分だった。温泉観光都市として急速に成長し、国際都市を自負する、いかにも別府らしいエピソードである。

明治4年に別府築港が完成、大阪方面への航路ができて別府は大きく伸びた。

これを第1次の発展期とすれば、明治末の電車、鉄道の開通が第2次。そして大正12年に日豊本線が全通して、別府を訪れる人は第3次のピークを見せた。別府駅もこの年に拡張工事をし、昭和2年にはホーム延長、翌年には待合室増設と、乗降客の増加に対処している。

訪れる人も多かったが、移住してくる人も多かった。新しい町には自由な気分がみなぎった。悪くい

えば植民地的だったかもしれないが、新しがりやでハイカラ好みの「別府っ子」の誕生である。

## ■速津媛の国

ともあれ別府は温泉とともに生き、発展してきた町で湯の歴史は古い。『豊後国風土記』にはすでに赤湯泉（あかゆ）や玖倍理湯井（くべりゆのい）などの記述がある。赤湯泉はいまの血の池地獄、玖倍理湯井は間欠泉だったようだ。

『伊予国風土記』の逸文にも大分の速見の湯を下樋（したひ）によって道後に引いたとあるから、国外にも知られていたわけ。速見というのは別府を中心とする古代からの郡名で、風土記には景行天皇がこの他を訪れたとき速津媛（はやつひめ）が出迎えたことから速津媛国と名付けたのが、のちに速見になったと伝える。

このとき媛は天皇に「当地の山に鼠石窟（ねずみのいわや）があり、これに住む青、白という強勢で衆類も多い土蜘蛛がいる」と告げている。青、白の石窟かどうかは別として、市内上人西町には鬼の岩屋という二基の巨石古墳があり、森山にも百合若伝

<メモ>

周囲にある名所旧跡等の別府駅からのおよその距離

- ◇別府温泉（駅一帯）
- ◇鉄輪温泉・地獄地帯（6キロ）
- ◇観海等温泉（3.5キロ）
- ◇堀田温泉（5キロ）
- ◇明簪温泉（9キロ）
- ◇鬼の岩屋温泉（4.5キロ）
- ◇石垣原古戦場・吉弘神社（2.5キロ）
- ◇上人ヶ浜公園（4.5キロ）
- ◇火男火売神社（5キロ）
- ◇朝見八幡社（大友氏が鶴岡八幡宮を勧請。2キロ）

説にちなむ太郎塚、次郎塚などの古墳がある。有力な首長の存在をうかがわせるに十分だ。

### ■怒った火の山の神

温泉の母体となるのは火の山の鶴見岳を中心とする山並である。市街地を抱くようにして、山なみは両手をひろげて海に落ちている。緑の山と青い海、間に展開するモザイクのような町並み。別府は山と海と町がよくマッチし、バランスのとれたところである。

その鶴見岳。いまはわずかに噴気がみられるだけ。1375メートルの山頂直下までロープウエーがかかり、市民や観光客の訪れが多いが、太古に激しく爆発した。鶴見岳と市街地の間になだらかなスロープの扇山がある。これが爆裂して残った旧火山の山体の一部。いまの鶴見岳が中央火口丘という。

市街地は海から山へとゆるやかな登り坂だが、その立地しているところこそ、爆発の泥流によってできた石垣原の扇状地と、その下の沖積層である。

噴火は有史時代になっても起こっている。『三代実録』によると、貞観9（867）年春、山頂にあつ

た青、黒、赤の三池が震動して岩石を吹き飛ばし火炎が立ちのぼり、降灰は数里に及んだ。山脚の交通は途絶え、熱水は川に入って無数の魚が死んだという。

もともと山を神として、火の神をまつる式内社の火男火売（ほのおほのめ）神社があったが、ときの朝廷は噴火を神の怒りと考えて、これをなだめるために神前で大般若経を転読し、両神の位階を上げている。山もときには怒らないと神威をうたがわれる。人間も怒るべきときには怒った方がよさそうだ。N

⑫ 別府（中）

温泉巡りに地獄巡り



◀ 別府の「看板」、たちのぼる鉄輪の湯けむり

火山によって出来た石垣原はやがて開墾された。爆発・噴火の所産だけに石が多く、それを積みあげて石垣にしたことから地名も生まれたようだ。これを手に入れたのが宇佐神宮。こうして石垣荘が生まれ、さらに新しい開拓をして石垣別府が成立する。この別府が別府の起源である。

別府の名称について、府内（大分市）の隣にあるからだとしばしば誤解されているが、これは荘園開墾のさいの太政官の許可証、つまり別府によるものである。

### ■古戦場・石垣原

中世、別府の地には大友氏の力が伸びてくるが、その大友氏が最後のあがきをしたのがほかならぬ石垣原合戦。大友氏は宗麟の子、義統の代になって豊臣秀吉に除国された。のち許されて江戸、京都と移り住んでいたが、関ヶ原の戦いで西軍に誘われ、なんとか豊後に再興を図りたいと別府に上陸、旧臣を集めて軍をおこした。

こうして東軍に属した黒田如水（孝高）軍と石垣原で対戦する。合戦は「西の関ヶ原、といわれたほ

ど激しいもので、すさまじい白兵戦。大友軍の勇将・吉弘統幸の討ち死を最後に大友氏は敗北し、息の根をとめられた。統幸の戦いぶりはみごとだったようで、いま古戦場の一角に吉弘神社がある。

### ■温泉開発の恩人

温泉の話に戻ろう。古代から知られた出で湯であるが、開発が本格的に始められたのは鎌倉時代かららしい。鉄輪を開いた一遍上人の話がある。

一遍は時（じ）宗の創始者。彼が豊後に布教の旅をしたのは健治年間から弘安元年（1278年）にかけてである。そのとき上陸したのがいまの上人ヶ浜であるとされ、ここに碑が立つ。

上人は鉄輪に歩を進めたが、目にしたのは「地獄」と呼ばれる噴気地帯。これをなんとか人々のために活用し、この世の「極楽」にならないものかと考えて、法力によって鎮め、温泉場を開いたという。そのさい呪法（じゅほう）として鉄の輪を投じたのが地名の由来ともいうが、すでに先述の風土記に河直（かわなお）山の名がみえており、それがもとになるらしい。

あるいは、それに鉄輪の字を与えたのが時宗の聖たちだったのか。開発の方法はよくわからないが、いずれにせよ一遍上人は鉄輪だけでなく、別府温泉の恩人である。鉄輪の温泉山永福時に上人の木像があり、秋の彼岸に感謝のために像の「湯あみまつり」をしている。


鉄輪帯はいまでも別府第一の噴気と熱湯の地帯で、立ちのぼる湯けむりは別府の豪勢な看板。海地獄、坊主地獄、鬼山地獄など、観光別府名物の「地獄めぐり」の中心である。

## ■有名な別府八湯

ところで、ひと口に別府温泉といっても範囲は広く、昔から別府八湯がよく知られている。鉄輪のほか、東別府駅の項で述べた浜脇はじめ、別府、観海寺、堀田、明礬、さらに亀川駅から近い亀川、柴石がそれである。

別府温泉は別府駅の南にある流川通りをはさんだ一帯で、海岸にも近く、市街地の中心としてホテルや旅館が立ち並んでいる。文化7(1810)年に伊能忠敬が測量をしたあとが流川4丁目にある。

これに対して観海寺温泉は山の手の高台。奈良時代の後期、仁聞の開基と伝える清湯山観海寺があったが、明治の初めに廃寺となり、地名を残す。後白河天皇の三女、式子内親王が藤原定家との恋に破れ、この地に來たとも伝えている。いまはデラックスなホテルが建つ。ケーブルカーのかかる遊園地のラクテンチも近くにある。

堀田はさらに山手で、石垣原合戦のさい大友軍の本陣が近くに置かれた。市街地の温泉に対して、いまだにひなびたものを残している。明礬は鉄輪からさらに山に入ったところ。明礬を産したことからこの各があるが、いまは「湯の花」を採取する独特の小屋に風情がある。十文字原高原も近い。 

⑬ 別府 (下)

新温泉都市へ飛躍を



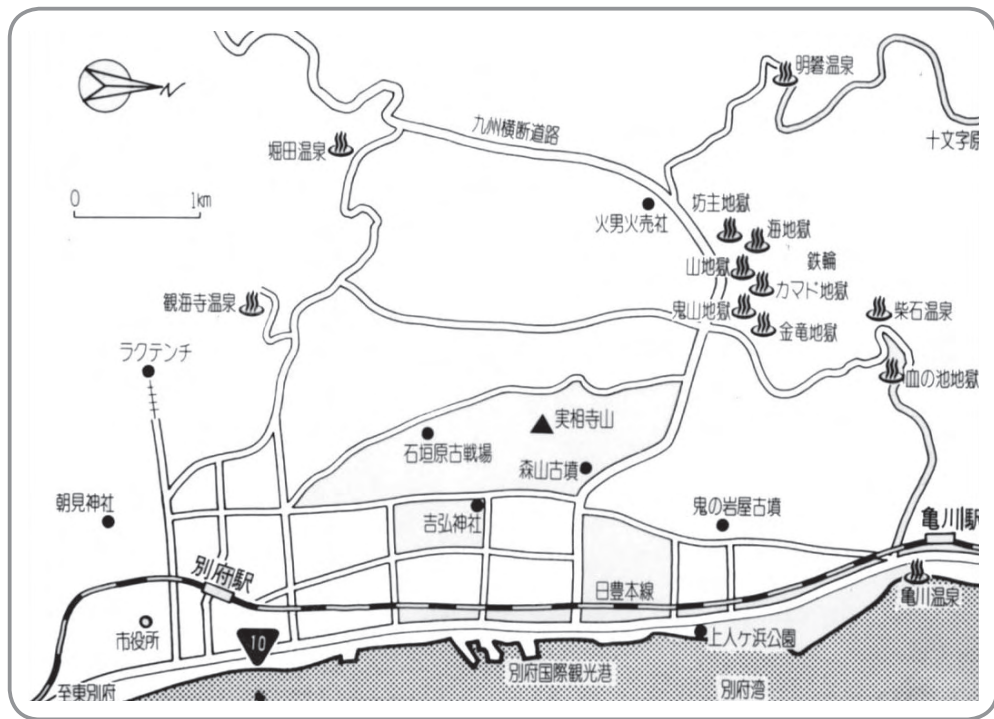
◀ 再浮揚を狙う別府の町

### ■江戸期のありさま

これらの温泉群が、湯治場として次第に活気をおびてくるのは江戸時代からである。とはいえ、まだまだ農漁村という感じが強く、大分県内の小藩分立によって出来た各地の城下町に比べれば、寒村の域を出なかったろう。

元禄7(1694)年、豊前、豊後を歩いた貝原益軒が『豊国紀行』を残しており、その中に当時の別府村のもようを書いている。

「別府は石垣村の南にある町で、民家百軒ばかり。民家の宅中に温泉十カ所があり、いずれも清い。庄屋の宅の中にあるのはことに美しい。この地の温泉は他郡にまさって清くやわらかである。家々に多いため、その館に泊まる客以外に浴びる者はない。このため浴数も時間も客の心にまかせて自由。他の温泉のかまびすしく騒がしいのに似ていない。かたわらに掛樋の水があつて、温熱は心にまかせて増減しやすい」



このほか、むし湯、海浜の砂湯なども紹介されており、寒村ながらいかに湯量が豊富だったかがわかる。

この他が明治に入って一気に発展してくるのは、最初に書いたように、交通機関の発達によるところが大きい。大正から昭和にかけて、別府に活力がみなぎったのは、まさに新興の気でもあったわけだ。

### ■ 歓楽街に冷たい風

「～豊後別府は東洋のナポリ、いまじゃ世界の湯の都～」とうたわれ、泉都の名をほしいままにした別府は、戦後もぐんぐん伸びた。高度成長の時代にはいりレジャーブームに乗って年間観光客がついに1000万人を超え、消費額も急増した。観光業界はわが世の春をおう歌したものである。

ところが現在、別府は曲がり角に立たされているが高度成長から低成長時代に入るとともに、冷たい風が歓楽街に吹き込むようになった。世相も、物の豊かさを追い求めた時代に比べ、人間性の豊かさを求める風潮へと変わってきた。観光の質も変化した。

### ■ 華やかに見えるが…

しかし別府は、正直なところ、この変化に鈍感だった。気がついたときには地盤沈下をきたしていた。

別府駅は高架化し、瀬戸内海航路も豪華フェリーの時代となるなど交通の便はよくなり、これに対応してホテル・旅館もデラックスになった。かつての石垣原も住宅で埋まり、別府栈橋が北の国際観光港に移転して北部開発も進んだ。一見それは華やかな発展にみえるが、内実はお寒い限りである。

いま別府は、模索の時代に入っている。従来、少しずつ進められた温泉の医療、農業などへの多目的利用を含めて、新しい観光の時代に対応する新しい温泉都市の建設が急務となった。それに向けての胎動はすでに聞かれる。新興の気運を背景に、エネルギーに満ちた往年の別府の再現が、いまこそ望まれる時はない。



⑭ 亀川

温泉を医療と福祉に

亀川駅開業：明治 44  
(1911) 年 7 月 16 日



◀ 身障者福祉施設として全国的に有名な太陽の家



車の渋滞がひどい。そこで海を埋め立てて昭和 59 年完成を目途にバイパスの建設が進んでいる。

温泉旅館や商店も、観光客向けに近代化が進んでおり、湯治場的な雰囲気は次第に薄らいでいたが、これを機に亀川温泉もまた新しい変化をみせるのではないだろうか。

## ■国立病院と太陽の家

泉質は多様で、効能も多方面だが、温泉と近代医学が大分県下で最初に結びついたのが亀川温泉だった。明治 41(1908)年 1 月、海軍病院が開設されている。戦後は国立別府病院となり、ますます充実しているが、特に鉱泥による温熱療法が注目される。

この病院を皮切に、別府市内には現在までに次々と温泉療法の施設が設けられてきた。九州大学生体防御医学研究所、別府整肢園、原爆被爆者別府温泉利用研究所、国立療養所西別府病院、国立別府重度障害者センター、新別府病院などである。

こうしたことから別府は単なる観光の町から脱して、医療・保養・福祉の町へと新しい顔を持ち始めているが、この点で注目されるのが国立別府病院の

東にある「太陽の家」。身体障害者福祉施設として全国的に有名で、身障者の社会復帰・自立を目指してユニークな工場も併設されている。

パラリンピックへの日本選手の参加、大分県下での第一回フェスティックの開催、さらに世界の人々が集まる車いすマラソンの定着など、「太陽の家」が原動力となっている。

## ■静かな柴石温泉

観光面では亀川温泉から「太陽の家」や国立病院の前を通って鉄輪方面へ向かうと、血の池地獄や竜巻地獄がある。血の池地獄がかつての赤湯泉であることはすでに紹介したが、竜巻地獄は間欠泉で知られる。ともに「地獄めぐり」では欠かせない見もの。

その少し奥が別府八湯の一つである柴石温泉。昔、川の底から柴（しば）の化石がよく出たことから名がある。その川のほとりに開かれた静かな谷間の温泉で、竹の樋（とい）から流れ落ちる湯で肩や腰を打たせる滝湯、あるいは石室のむし湯などがある。近年、洪水で荒らされたが、完全に復興している。

トンネルをくぐると、すぐ鉄輪だ。



<メモ>

周囲にある名所旧跡等の亀川駅からのおよその距離

- ◇亀川温泉（駅付近一帯）
- ◇関ノ江海水浴場（別府市唯一の海水浴場、1.3キロ）
- ◇太陽の家（1キロ）
- ◇国立別府病院（1.3キロ）
- ◇血の池地獄・竜巻地獄（2キロ）
- ◇柴石温泉（3キロ）
- ◇鉄輪温泉（別府駅の項で紹介。5キロ）
- ◇別府競輪場（1キロ）
- ◇鬼の岩屋古墳（別府駅の項で紹介。2キロ）

---

## デジタルブック版

### 「ふるさとの駅＝各駅停車・大分県歴史散歩＝」（3）

---

2007年3月16日初版発行

筆者 梅木 秀徳

編集 大分合同新聞社

制作 別府大学メディア教育研究センター

発行 NAN－NAN事務局

〒870-8605 大分市府内町 3-9-15

大分合同新聞社総合企画室内

このデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたウェブプロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環として作成・無料公開しているものです。デジタルブックは、ほかにも多数。ネットに接続して上記ボタンを押し、「NAN-NAN」のサイトをご利用下さい。